

審査論文の要旨

本論文は、魏晉南北朝時代（3～6世紀頃）の青銅製容器を研究対象とし、中国全土から出土するそれらを悉皆的に集成した上で、器種ごとに詳細な型式分類と紀年資料にもとづいた時期区分をおこない、各時期の分布状況を検討し、その変化や地域性の背景について考察したものである。中国では殷代以降の遺跡から、おびただしい数の青銅製容器が出土しており、それらに対する研究は枚挙に暇がないが、そのほとんどは秦漢代以前を対象とするものであり、魏晉南北朝時代に関するものはそれほど多くない。魏晉南北朝時代には、響銅という西域由来の新たな青銅製容器が登場するなど、隋唐代へつながっていき、朝鮮半島や日本列島にも影響を与える新たな動きがみられることが先学によって指摘されているが、それがいかにして中国に定着したのか、在来の青銅製容器製作との関係はいかなるものか、などについてはほとんどわかっていない。魏晉南北朝時代のあらゆる青銅製容器を網羅的に集成し、理化学的分析の成果も踏まえつつ、西域由来の響銅を当該期の青銅製容器全体の中で位置づけた点は本論文の最大の特徴である。

その構成は大きく5つの章からなり、それに序章と終章を付加する。第二・四章は日本の査読誌に掲載済みの論文を核とし、第五章も日本の査読誌に掲載が内定している論文である。

まず序章は当該期の青銅製容器の研究史を悉皆的に渉猟した上で、青銅製容器全般に関する研究、個別器種に対する研究、製作技法に関する研究、法量（サイズ）に関する研究に大別して整理し、それぞれに残された課題を浮き彫りにしている。また魏晉南北朝時代の青銅製容器について型式学的分析、製作技法の分析をおこない、青銅製容器から当時の社会様相や文化的交流関係を解明することを本論文の目的とすることが簡潔に述べられている。

続く第一章は「魏晉南北朝時代における青銅製飲食具の展開」とし、青銅製飲食具を検討している。まず用途から盛食具、飲器、盛酒具、附属器具に分類し、それぞれの器種について型式を設定し、共伴関係や紀年墓出土資料などを参照に編年をおこない、魏晉南北朝時代の青銅製飲食具を三国西晋期から東晋五胡十六国期までの第Ⅰ期と南北朝期の第Ⅱ期という2期に大きく区分した上で、各期の青銅製飲食具の特徴や第Ⅱ期になり顕著になる南北の地域性を浮き彫りにしている。

次の第二章は「魏晉南北朝時代における青銅製鏃斗の展開」とし、魏晉南北朝時代においてもっとも代表的な煮沸具であり、漢代以前からみられる青銅製鏃斗を網羅的に集成した後、青銅製鏃斗の各部位を属性として捉えてその組み合わせから型式を設定し、共伴関係や紀年墓出土資料などを参照しながら編年をおこない、第一章で検討した時期区分の中で青銅製鏃斗の分布の背景について考察を進めている。第Ⅰ期には中国北部では漢代以来のものが使われるのに対し、中国南部で新しい型式が出現し、第Ⅱ期になると中国北部にもそれが伝播することについて、当時の政治的状況をふまえながら説明している。

次の第三章は「魏晉南北朝時代における青銅製雑器の展開」とし、青銅製雑器を用途により、水器、暖房具、貯蔵具、文房具、褻器、灯火器に分類し、それぞれの器種について型式を設定し、共伴関係や紀年墓出土資料などを参照して編年をおこない、同じく

2 期に区分した上で、漢代からの連続性が認められる第Ⅰ期と、仏教の普及に伴って銅水瓶などの新器種が出現する第Ⅱ期の違いを鮮明に浮かび上がらせた。

次の第四章は「魏晉南北朝時代における青銅容器の製作技法について—響銅を中心に—」とし、魏晉南北朝時代の青銅製容器に対する理化学的分析の事例を網羅的に集成し、製作技法、化学組成、器種から青銅製容器を5群に分類した上で、時期ごとに検討をおこなった。「鑄造後の轆轤挽きによる切削技法が肉眼で観察され、器壁を薄くつくった青銅製容器」を「響銅」と定義した上で、第Ⅰ期（東晉五胡十六国期）は数も少なく、輸入品であったのが、第Ⅱ期に入ると数が増え、中国在来の青銅製容器製作と融合した確実な中国製の「響銅」が出現したことを明らかにしている。

次の第五章は「南北朝時代における青銅容器の法量についての考察」とし、魏晉南北朝時代の中でも明らかに実用品とは考えがたい小型の青銅製容器が出現する南北朝期を中心に、各種青銅製容器の法量（サイズ）を検討、考察を加えたものである。大・中・小型品を設定した上で、中・小型品について日常生活で用いられた大型品を模倣してつくられた副葬専用の明器とし、水瓶を中心とする中・小型の青銅製容器セットが仏教の盛行を受けて北朝の墳墓に副葬されたことを論じる。

最後の終章は、これまでの検討によって明らかとなったことを整理しつつ、魏晉南北朝時代における青銅製容器に関連する歴史的背景および外来文化の影響を論じている。具体的には三国西晉期から東晉五胡十六国期にかけての青銅製容器は基本的に漢代のものを継承していたのが、南北朝期に入ると仏教の普及とともに西域由来の響銅製容器が本格的に登場し、水瓶などの新たな器種も出現すること、在来の青銅器製作技術と融合した中国独自の響銅製容器が出現し、隋唐代の青銅製容器の基盤となったことを論じた。また今後は響銅製容器とともに当該期に出現、普及した陶磁器、ガラス製容器、金・銀製容器との比較研究が必要であることを展望として述べた。

以上のように本論文は、魏晉南北朝時代の墳墓を中心とする遺跡から出土した青銅製容器を悉皆的に集成し、それらに対する器種ごとの緻密な型式学的検討や、時期ごとの分布状況に対する検討をおこない、響銅の出現に象徴される当該期の青銅製容器の特質や、中国の南部（南朝）と北部（北朝）の地域差を明らかにすることに成功した。中国では殷代以来、近現代にいたるまで青銅製容器を含む青銅器の製作が連綿と続いており、いわば中国文明を代表する文物ということが出来るが、秦漢代と隋唐代の間にあり、分裂と混乱の時代である魏晉南北朝時代の青銅製容器が隋唐代以降の青銅製容器の基盤を形成していたことを具体的な出土資料にもとづき、仏教の普及などと関連付けながら明らかにした意義は大きい。以下の審査によっても明らかなように、個々の方法論や分析の進め方などには様々な課題があり、出土資料の分析結果と歴史的背景との接続についても粗削りな部分を多く残しているが、中国魏晉南北朝時代の青銅製容器について、多角的に論じた独創性の高い研究として評価できる。